

笠女郎の文字「死変」

——万葉集卷四・六〇三番歌——

八木京子

一、はじめに

おもかにしにするものにあらませばちたびそあれはしにかへらまし
念西死為物尔有麻世波干遍曾吾者死變益 (④六〇三)

笠女郎の歌である万葉集六〇三番歌は、巻四に一群をなす、家持に贈られた二十四首のなかに含まれる。一人の人物に贈られた歌群としては万葉集中、最大であるこの二十四首の歌群について、先学の研究史を辿っておくと、従来、その構造論に重きを置くものが中心であり、女郎から贈られた歌を時系列に則ったものとして見る構成論（連作論）や、またその贈答がなされた各時期の心情に分け入ったの分類、その命名といった論が盛んに行われてきたものであった。¹⁾ もちろんこれらの歌々が、家持に対しておそらく数次に分けて贈られたであろうことは、当該歌群末尾の二首に付けられた左注に「右二首相別後更贈」とあることから、おのずと推察することが可能である。

ところで、このように構成面において、さまざまに活況を呈してきた

笠女郎論であるが、笠女郎という一人の歌作者に立脚した上での考察は、その出自経歴が明らかになり得ないという状況が災いして、彼女が紡ぎあげる歌一首一首の「ことば」の理解についても同様、いまだ深く考究がなされているとは言い難い現状にある。

本稿で問題としたい六〇三番歌については、早く『代匠記』以来、その類型歌として巻十一・二二九九番歌の人麻呂歌集歌「戀こひするにしにするものにあらませはわかみはちたびにかへらまし為死為物有者我身千遍死反」の存在が指摘されている。「しにかへらまし」の詞句を持つ歌は、万葉集にこの二例しか見られず、ここに挙げた二首の歌について、それぞれの注釈書の解釈に大きく異同を見ることはない。そればかりか、当該笠女郎の歌について、人麻呂歌集歌の模倣であることから、「思ひ入った様が歌はれてゐるが、（中略）人麻呂集に類歌があるので、手柄にならない」（武田『全註釈』）と、手厳しい評をも受けざるを得ない事態となっている。しかし端的に言って、人麻呂正述心緒歌に「死反」と表記される「死に反らまし」と、「死変」と書かれる笠女郎歌のそれには、一首全体の表現を含め、まったく相違

は認められないと言ってよいのだろうか。

いま、笠女郎の「歌ことば」について言えば、その大胆とも言える「恋死」の誇張表現に明らかなように——それは、青木生子氏が夙に指摘した、「抒情詩の本質（純粹性）」に起因する普遍性だとは言え——、また、万葉集に唯一の表現である「吾が命の全けむ限り」（④五九五）、「命死ぬべく恋渡るかも」（④五九九）などという自らの「生」を規定する詞句や、また「死にす」（サ変動詞）（④五九八、④六〇三、④六〇五）といった、「恋」に纏わる「死」の独特な表現は、その懊悩のために、身も細らんはかりに体感した「死」を（④五九八）、恋たるものを知った女郎みずからが、客観的理知的な視点で捉え返した、独自の表現性に立脚したものだと思われる。³

「死変（しにかへらまし）」という詞句でもって象^{かた}られる表現性もまた、人麻呂の類歌「我が身は千遍死に反らまし」を踏まえつつも、単に「死」を同じ「身」が漫然と繰り返すのではなく、「千遍そ我は死に変わまし」と、特別視された「われ」が、命を賭した恋のために自発的に「新たに死に変へる」と歌ったものと捉えられるのではないか。

以下、ここに述べた点について、聊か直情的とも言える恋歌を多く残した閨秀歌人、笠女郎の歌一首に関して、その文字用法の面から、また初句「念ふにし」⁴との係わりをも視野に入れながら、当該一首の解釈を試みたい。

二、笠女郎六〇三番歌の諸注勘案

既に記したように、笠女郎六〇三番歌と、類歌である人麻呂の一首の末の句の解釈について、ことさらにその違いを指摘している注釈書の類

は、当面見当たらない⁵。おおよその解釈は、「物思いをして死ぬものだとしたならばわたしは千回も繰り返して死んでおきましょう。」（木下正俊氏『全注巻四』六〇三歌口語訳）、「恋をすることで、もし死ぬものであったら、この身は千度も死ぬことを繰り返したことだろう。」（稲岡耕二氏『全注 巻十一』二三九〇歌口語訳）などとされる通り、「カヘルは反復を表わす補助動詞として用いたもの」（木下『全注』）として解釈されている。これは現行の殆どの注釈書の理解であるが、これと異なる説を唱えているものに、土屋『私注』がある。即ち、

シニカヘルは死を繰り返すことではなく、死よりかへる即ち蘇生することであらう。ヨミガヘルと同じ語の成立と見るべきだ。（以下略、巻三・三二七「将死還生」を「ヨミガヘリナム」と訓むことを傍証にあげる）

とした上で、その大意を、
人を思ふことで死ぬものであらうならば、私はその思で千度も死にませう。そしてまた、千度も死からかへり来てなほ思ひつづけませう。

と解釈する。同様、武田『全註釈』は、「シニカヘリは、死んで帰る意。ヨミガヘルと同じ語構成である」（語釈）としているもので、「カヘル」を「帰る」の意に解している点に、独自の理解を展開している。

しかし、先述したように、笠女郎歌と人麻呂歌の「しにかへる」の語句について、一般的には「千遍も死ぬことを繰り返す」とそれを解釈するものが主流であり、その点において訳出の上で違いを指摘している注釈書は多く見られない。

そのような中であって、訳出というレベルではなく、上句との関係も含めて、その歌がらの違いに言及する、茂吉『評釈篇』、また稲岡

『全注 卷十一』(二三九〇歌)⁽⁶⁾の指摘は看過できないものがある。茂吉『評釈篇』の人麻呂歌集の理解を、次に見ておきたい。

一首の意は、若し人間が恋をすれば死ぬものだと思せば、己などは千遍も死んで死に死んで死に死に繰り返すことだらう。といふのである。

これも、恋の死ぬほどに苦しいといふことから、自嘲のやうな気分にもなり、諧謔のやうな気分をも交へてかういふ歌になった。恋をすれば一々死ぬとされては溜まったものでないといふやうな気分もあるのである。それだから、一首の気持はそんなに単純ではない。

この茂吉の指摘を発展的に継承し、人麻呂歌集の当該歌を集団の戯笑歌のひとつとして捉えたのが、稲岡耕二氏の解釈である。氏はまた、笠女郎歌との違いについても触れ、『全注』の「考」において次のように述べている。

上句の「恋ひするに死にするものにあらませば」は、相手を変えた多くの恋を想像させよう。これに対して女郎の「思ふにし死にするものにあらませば」は、一人の相手(家持)に思いを寄せることで死ぬものであったならばと言うのであって、「恋ひする」と「思ふ」の相違が恋の対象を単数にも複数にもするわけである。それが第四句の「我が身は千遍」「千たびそ我は」とも関連している。人麻呂歌集の歌では「心」に対する「身」が意識され、死なずにすんでいる現状を肯定する気分を表わしているが、女郎作歌には「思ふ」故に死ぬのだったら千遍でもそれを甘受してはばからない情意を感じさせる。

本稿において問題となるのは、人麻呂歌集の戯笑歌としての理解ではなく、飽くまで笠女郎の歌の解釈であるのだが、類似の句をもつこれら

二首の違いを、初句の「恋するに」と「念ふにし」との違いに認められた稲岡氏の視点は重要であると思われる。

既に『私注』(二三九〇歌・注)に、「(笠女郎歌と)人麿歌集との比較は、よく言はれる所であるが、笠女郎の方が幾分立勝つて居ることは既説の如くである。初句でもあるが、主な差は第四句によると見える。

女郎の方が調が強い。」と指摘があるところだが、実際的に恋の対象であった家持個人に贈られた歌——それも一方的に思い続けるばかりで、遂げることのなかった恋——というシチュエーションが明らかである笠女郎の歌について、人麻呂歌のやうな、恋というものを一般化した上での自嘲性・諧謔性といった気分はやはり看取されまい。

『私注』が、「女郎の方が調子が強い」「死を欲して居る歌ではなく、生きて思ひつづけることを願つて居る作と見ねばならぬ」(六〇三歌・注)と、なかば直観的に言われていることは、看過できないことがらである。第四句に「千遍そ我は」と歌う在り方は、もし「思い」の深さによって死ぬことがあるのであれば、自分は、何度でも我が意によって「死」を受け入れ、また幾たびかの生を一人の男性に捧げんとした、個人の意志による決定的な強さが察せられるところである。この「心」の強さはまた、一方で、我が「生」による「情念」は、肉体(身)をも制御し得るといふ、ある意味において不条理に満ちた「理知」とでも言うべきものなのであるが、そこにまた、女郎ならではの歌想の特異性を見ることができよう。⁽⁷⁾

ところで、人に「恋ふ」といふ情が、相手がそこに存在しないために、心も身も相手方に惹かれることによつて、湧き興る情感であることは既によく知られるところである。それに対し、「念ふ・思ふ」の対象は、「人」である場合ばかりではなく、自身の胸中に思い描かれる「概念」

であったり、また願望、執念であったりと、その基点が「感情」を発する「われ」の側に存する、いたって意識的な行為であることが言われてきている。⁽⁸⁾

笠女郎の「念ふ」もまた、その想いが双方向ではなく、飽くまで一方的であり、自らの想いに終始してしまうことにおそらく気付きはしながらも、なお歌わずにはいられない「念ふにし死にする」の情なのであり、ここに相前後して配される歌々に、やはり「念ふ」の語が散見されることも、あながち偶然だとは言いきれないと思われる。しかしまたこのことについては、本稿で試みるところである、笠女郎六〇三番歌の「死変（しにかへらまし）」についての解釈を、詳細に見た上で、答えをだすべき課題であろう。まずは、諸庄の一首の理解を見渡すことをもって、次節への橋渡しとしておく。

三、「死反」と「死変」

前節に挙げた諸注釈が指摘していたように、「しにかへる」の語が「死を何度も繰り返す」意であるという理解は、「反」の文字を丁寧に考証することによって確認することが可能である。「反」の文字は、『篆隸万象名義』に「反、非遠反、本也、難也、習也」、『新撰字鏡』に「反覆也、本也、返同」とある他、『説文解字』に「覆也」、『廣韻』に「反府遠切、反覆、又不順也」（上声阮韻第二十）などとあるように、「本」「覆」といった、意味あいを拾うことができる。他の漢籍を見渡すと、詩賦の用例ではないが、『論語』（述而）の「子與^レ人歌而善、必使^レ反^レ之、而後和^レ之」の本文を、『論語集解』（何晏）は「樂其善、故使^レ重^レ歌^レ而自和^レ之」と解釈し、その「反」の文字を、『論語義疏』（皇侃）は

「反、猶重也」と注している。即ち、歌を学ぶには、上手な相手に繰り返し歌わせた上で、その後には自ら和するのがよいとの説明がなされているのであり、「反」の訓詁に「重」があることが知られる。

また、『後漢書』の用例になるが、その斑固伝に「覆以^レ懿鑠」とある李賢注に、「覆、猶重也」とあり、「反」に字義の通う「覆」の文字も同様、「重」の意を有することが知られる。⁽⁹⁾

そもそも『万象名義』や『新撰字鏡』に「本」とあるのは、おそらく「もにかへる」の意を記したものであって、「反」が「復」の訓詁を持つことにも証明されるように、『毛詩』国風、衛風「不思^レ其反」の鄭玄箋に「反、復也」、また周頌、執競「福祿來反」の毛亨伝に「反、復也」とある、「繰り返す」ことはまた、位置的に元の場所に戻り、初めにかえって再びやり直すということを意味するものである。⁽¹⁰⁾

万葉集には、もちろん「三元の場所にかへる（帰る・返る）」の意に、「反」の文字を宛てた例も、少なからず見られるのであるが、

河内女が手染めの糸を繰り反片糸^{かへし}にありとも絶えむと思へや

（⑦三三二六）

切目山行き反道^{かか}の朝霞ほのかにだにや妹に逢はざらむ

（⑫三〇三七）

これらの歌に、「繰り返す」の意の「かへる」「かふ」を「反」と記した例が見られるとおり、人麻呂歌集の「我が身は千遍死に反らまし」の「死反」もまた、「死」を何度も繰り返す意と考えることに支障はないものと思われる。

ここで問題となるのは、むしろ笠女郎の「死変」の表記であって、既に漢籍の用例を見たとおり、「覆」「重」「復」といった字義をもつのは「反」であって、「変」にはこれらの意は全く見られない。「変」の文字

は、『万象名義』に「変、彼媛反、改_レ常也、改_也」、『新撰字鏡』に「化也、易也、更也」、『説文解字』に「更也」、『廣韻』に「彼眷切、化也、通也、易也」などの字義を見て取ることができ、万葉集の義訓に「黄変」「変水」「移_{うつろ}変」などと用いられることにも明らかのように、「変」は基本的に「化」「易」「更」といった、四時変改の意を有する文字であることが知られる。

『文選』に現われる「変」を見てみると、有名な古詩十九首（巻二十九、第十二首）に、

東城高且長 逶迤自相属 廻風動_レ地起 秋草萋已緑 四時更变化 歳暮一何速

とある詞句の李善注に、『周易』を引いて「四時变化而能久成」と説明されている。もとよりこれは、秋の到来を、季節の絶え間なく移ろう中において捉えたものであり、物色の「変化」するさまが窮まることなく無限に続くことを詠んだ詩文は、大陸にそれを多く見得るものである。同じく『文選』の宗玉「高唐賦竝序」（巻十九）に、「其上独有_二雲氣、崑兮直上、忽兮改_レ容、須臾之間、变化無窮」とあるもので、即ち、雲気の変化が須臾にしておこり、その変態が無窮であることを詠んだものが見られる。

「変」の説明に諸注が度々引く『周易』は、天地自然の運行による陰陽の変化のことをいう詞章が多いことから、それを引くことは当然とも言えるのであるが、その乾伝、「時乗_二六龍以御天、乾道变化、各正性命」の注に、孔穎達『周易正義』が、「変謂_二後來改_レ前以漸移改、謂_二之変也」と注していることは特記されるべきであろう。これは、「変」の文字が「前を改めていく」といった、移りゆく「時間性」をも内包する文字であることが知られるもので、その点は注意されて然るべきだと思う

れる。

即ち、「変」の文字がもつ字義について、ここで確認しておきたいことは、万物やまた、行為の運行・様相が、「常に改まっていく、更わる」（『万象名義、新撰字鏡』）といった、変容の過程そのものを文字が表象していると言うことに他ならない。いま「更」、「改_レ常」、「更相生」と説明する注疏に注目したい。『礼記』「刑者側也、側者成也、一成而不_レ可_レ変、故君子尽_二心焉」（王制）の鄭玄注には、「変、更也」、また『毛詩』七月序の部分は、種々の解釈が見られるところだが、「周公遭変」とある部分の孔穎達『正義』に、「変者改_レ常之名」と説明されている。また、『淮南子』（原道訓）には、

音之数不_レ過_二五、而五音之変、不_レ可_二勝聴也。味之和不_レ過_二五、而五味之化、不_レ可_二勝嘗也。

とあって、高誘は「変、更相生也」と注している。これは五音や五味の調和のことを言い、万物の生成の過程を述べた部分であるため、無批判に「あらたに生まる」ことの用例として引くことには慎重でなければならぬが、いまここに一通りみたように、「変」の文字の大勢としての用法は、あらかじめ確認されたように思われる。

以上のように「変」の訓詁を詳細に見てきた所以は、無論、笠女郎の「死変」の文字遣いに言及するためであるのだが、如上のように「変」の文字の字義について、その用法を見渡してきた視点から言えば、単純に「反」と同義として、「繰り返す」の意と考えることには、やはり躊躇せざるを得ないように思われる。

前節において、歌の解釈を示したが、「念ふ」と「恋ふ」の差異にもここでは、注目しなければならぬだろう。「念ひ死ぬ」ことと、「恋ひ死ぬ」こととの径庭は、如何ようなものであろうか。ここでは、当該歌

の歌群の中での位置づけも考えなければならぬところだが、笠女郎は、同歌群の中に、「オモフ」の語を実に多く用いている（五八七、五九一、五九四、五九五、六〇一、六〇二、六〇三、六〇五、六〇六、六〇七、六〇八、六〇九）。そして、そこに見られる多くの「念」の文字は、通常、「一念を凝らす」といった意で用いられ、『説文解字』に、「念、常思也」とあるように、「思」の状態が長く続いたものと考えられる（『説文通訓定声』に「謂長久思之」）。類型化されて用いられる「恋死」と、ここで歌われる「念死」に、敢えて違いを見出さずならば、後者の表現には、相手を慕う情念の強さと、またその継続性を歌い上げることができるところにある。「常に思う」状態は、その時間の長さにおいて、永遠性をも予感させる。自分の意志によって「オモフ」ことを歌にする在りようは、相手に惹かれた状態を「恋フ」と歌う類型歌に一步も二歩も勝って、自己の熱き心情を、恋歌の形式を借りながら意識的方法的に吐露することを可能としているものである。

ところで、以上のように述べたところで、「変」を「反」の単なる借訓として考える可能性も、井上『新考』、鴻巣『全釈』らが指摘するよ
うに、まったく払拭されたわけではないだろう。しかし、古字書によれば、両用字の韻が違ふことから、それが単に通用したともまた考え難いことは事実である。⁽¹²⁾ 笠女郎当該歌一首の歌がら、そして彼女が万葉集に残した「念ふ」ことを歌った多くの歌々において、この「変」の文字は借訓という音要素に支えられた、義訓性をも帯びた文字用法であるように思われる。しかしまた、このことに関しては、万葉集の「変」の文字について、「かへる」の和語との関連から、もう少し補強しておく必要がある。

四、万葉集の「かへる」——笠女郎歌の理解に向けて——

万葉集には、「変」の文字を用いた義訓、「黄変」「変若」「移変」などの熟語が見られるが、これらのうち「変若」については、今のところ漢籍には用例を見出だし得ていない（因みに「死反」「死変」も見当たらない）。そもそも「をつ」（若返る）という和語自体が、日本古来の発想に通じるものであり、それに「変」「変若」の文字を用いている（三三一、六五〇、一〇三四、一〇四六）ことは看過できない問題を孕む。和語「をつ」の語意は、『時代別国語大辞典 上代編』によれば、「若返る。蘇生する。復活する。」であり、その伝説の根源は、「月の盈欠けを死と復活とに擬す」ことにあると言われている。そもそも「蘇生する」とは、月が満ち欠けを繰り返すように、同じ「身」において——、もちろん「身」に再び召喚されるべき「魂」もまた、同一のもの、即ち「身」と「魂」は原則として不即不離の関係なのであるが——、若さを取り戻すことであった。「ヨミガヘル」の和語の成り立ちが、「黄泉」より「かへる」という意に淵源をもつことにもそれは如実に察せられよう。「死」を繰り返すことは、また同じ身をもって蘇ることに繋がるのであり、その意味において、死と生の「円環構造」は、いまだこれらの「やまことば」の内部に、もちろん「シニカヘル（死反・死変）」の語のなかにも脈々と息づいていたものと思われる。万葉人が、

朝露の消易き我が身老いぬともまた若反君をし待たむ

(11) 二六八九

露霜の消易き我が身老いぬともまた若反君をし待たむ

(12) 三〇四三⁽¹³⁾

と歌うとき、「我が身」そのものが、再び「若返って命を永らえる」ことよって、未来永劫に継続されるべき「恋情」を、歌い上げたものであったことは言うまでもない。恋心の強さのために、再び永く生きて君を待ちたい、と願うその心情は、それが果たされない念いであればなおのこと、さらに一層湧き起こる情であったのであろう。そこには、継続性・永遠性の中におのが「情念」をおき、「身」の制約を超えてでも、恋をまっとうしたいと願う、恋歌のひとつの在りようが確かに存している。そしてまた、その「ヲチカヘル（若くなる）」という変化自体は、たとえ同じ人間の「身」の変態であったとしても、「若反」「変若反」という文字でもって表わされるべき変容であったことに、この際注意しておきたい。

ところで「かへる」の和語は、第一義である「同一のものの上下・表裏とか、運動の方向とかが逆になる」という意味に用いられるほか、月易て君をば見むと思へかも日も易ずして恋の繁けむ

(⑫三三三二)

あらたまの年可敵流まで相見ねば心もしのに思ほゆるかも

(家持⑩三九七九)

のような「かへる」の用法も見られるもので、これらが「月」や「年」の初めに「戻る」意であるのか、また年月が「改まる」意でもって用いられているのかは、実に判断が微妙である。『新編全集』はこれらの歌について、その頭注に、「月変へテは、月が改るのを待って、の意」(⑫三三三二)、「このカヘルは交替して新生する意」(⑩三九七九)と説明を加えている。⁽¹⁴⁾

ここに用いられているような「かへる」の用語の理解は難しいが、見まつりていまだ時だに更ねば年月のごと思ほゆる君

(余明軍④五七九)⁽¹⁵⁾

などの歌が、「時」を対象としながら、「かへる」と歌っている点に留意するならば、これらの「かへる」の用法もまた、自動詞であるの「かはる」の語義に徐々に近似していくものとして、「交替して新生する」「改まる」「更」の字義を『説文解字』は「改」とする、『万象名義』も同)の意と捉える考え方を、本論では支持したい。さらに付け加えるならば、和語「かへる」の語は、一方で「元に戻る」という原義的な意味を保ちながら、特に「月日」や「時」を主語として表現する場合には、単に元の状態に戻るのではなく、時間を線条的な観念において受け止めた上で、「か(易)へる」「か(更)はる」という表現へと転じていったと見ることができるよう思われる。

このように「かへる」の和語の用例を幾つか見てきた上で、笠女郎の「シニカヘル(死変)」はどのように解釈される余地を残しているだろうか。取りも直さず、いったい、笠女郎にとって「死に変へる」と歌うことは、どういう事態であったのか、ここで正面から問われねばならないであろう。前述したように、単に漫然と同じ身が、何度も生き返っては死に、生き返っては死に、という古代的な円環構造をなす死生観のままに、この歌を詠んだとは思われないのではないだろうか。

若干、時代は降るが、『新撰字鏡』の「稌」の文字には、「稌 又作 甦、更生、与弥加へ利」とあり、そこに「更生」とあることは注意されてよいだろう(「更」の文字に「改」の字義があることは先述した)。また万葉集には、一例ではあるが、植物の再生について「オヒカハリオフ(生更生)」という表現も見られるのであり、生の実態において、「死」と「生」との在り方が、単純に「元に戻って繰り返される」と捉えるだけではない、新たな観念が芽生え始めていることに気付かれよう

〔姫女らが後のしるしと黄楊小櫛生更生わひかはりあひてなびきけらしも〕家持⑩四二
一一〕。

笠女郎においてもまた、「シニカヘル」と歌うことは、いま現在の「生」、それ以前の状態、即ち「元に戻る」ことを繰り返すという考え方で、死が把握されているのではなく、線条的に時間を捉える観念のもとに、生まれ変わって生きる「生」として、「死」を認識しているものと推測される。「我が身」そのものの生死——それは古代的な発想として、「ヲチカヘリ」の観念を伴う——、を歌うのではなく、敢えて「われ」と歌う在り方は、例え身は、何度も生死を繰り返そうとも、「われ」の一途な念いは、継続的に絶えることなく続くといった意味あいが、看取されるところであろう。人麻呂歌集歌に歌われたように、身とともにあり、その生死の度に繰り返し経験され、何度も重ねられていく恋というような捉え方ではなく、飽くまで身は何度その姿を変えようとも、一人の男性に捧げる恋の念いは変わらず永続的であることを歌っているのが、この笠女郎の当該一首であると考えられよう。

このように考えを巡らせた上で、笠女郎の「死変」の文字に再び言及するならば、「死」を繰り返すことを、何度も重ねる意の「反」の文字で示さずに、「変」で表現したことは、それなりに意味をもつのではないだろうか。即ち、時間の概念を含み込みながら、既にあるものを改めていくことを本義とする「変」の文字は、上に述べきたったように、単に元の状態に戻るのではなく、生まれ変わる（更生する）ものとしての生きとし生ける者の「生」を、敢えて、文字でもって意図的に表わしたと推測されるのである。

五、おわりに

以上に述べたような笠女郎の「死」をモチーフとした表現は、その「死」とうらはらにある「生」において——、いわば逆説的に、「生」ある限りの継続的な「念い」を歌い上げるべく用意された「歌ことば」として——、彼女の「情念」の偽らざる姿を浮き立たせることに十分に機能していたと言える。これら笠女郎に見られる斬新な表現性は、次に挙げるような歌々にも、その様相をはっきりと見てとることができよう。

我が命の全けむ限り忘れめやいや日に異には念ひ増すとも

④五九五

天地の神の判ことわりなくはこそ我が念ふ君に逢はず死にせめ ④六〇五

おのが命の全うする限り（命が途絶えるぎりぎりまで）、相手を念い続け、その念いの揺るぎないことを歌う五九五番歌は、「我が生」の限界を「全し」の語で表現するという「ことば」の奇抜さも手伝って、「念い」の絶えざるさまを相手に訴えかけることに、実に小気味よく成功している。

また、六〇五番歌に見られるような、やはり逆説的に「死」を「生」へと、瞬時に転換させた上で歌いあげる表現技法も同様、本論で取りあげてきた「シニカヘル」の歌ことばに連なるものとして、看過できない女郎独特の恋歌の手法であると思われる。自分が念う相手に「逢わないで死ぬはずがない」と訴えかけることの、その裏にある真理とは、神祇の公明さを信じるからこそ、「逢えること」に思いを託しながら「命を継いでいる」自分があるのだ、と自己の「生」を強調する構想において認められるのである。

本稿で論じてきた、当該六〇三番歌「死に変へらまし」の一首について、先述のように『私注』は「死を欲して居る歌ではなく、生きて思ひつづけることを願つて居る作と見ねばならぬ」と言っている。女郎の欲した「生」とは、絶え間なく「念う」ことの連続相の中にこそ実感し得た「生」であり、それゆえに、それは常に「死」と隣り合わせに表現されるものでもあったのだろう。

人麻呂歌集に既にあったように、繰り返す意を表わす文字として、「反」が一般的に定着していたにも拘わらず（少なくとも、字義と和訓が対応している点において、正字であると言える）、ここで「変」と借訓字を用いる意図についても、如上のように笠女郎の恋歌の手法を考へる中で、理解することができるものと思われる。

笠女郎の歌について、従来、その構成論を多くし、個々の歌において解釈が加えられることの少なかつた現況を、反省的に受け止めながら、六〇三番歌の一首を中心に考えを述べてきた。⁽¹⁸⁾「しにかへらまし」という詞句は万葉集に二例のみでありながら、その末句に記される「死変」の文字遣いが、類歌である人麻呂の「死反」と異なることから、その理解について、初句の「念ふにし」と第四句の「千遍そわれは」の「われ」に特に着目して論を展開してきたものである。

そしてまた死生観の違いについても、人麻呂の時代にまだ観念として色濃く残っていたであろう円環的な「生死」の繰返し構造とは違うものとして、笠女郎の「生」と「死」の捉え方を、飽くまでその「身」に拘わるのではなく、「情念」の連続相として見ることをした。そこにおのずから笠女郎の独自の表現を知ることができたように思われる。

しかしまた、笠女郎の文字遣いということにおいては、それが偶然ではなく、意図的に成されたものであるのか、また彼女の残した他の歌々

にそのような要素がみられるのかどうか、といった問題は、今後更に考究が深められねばならないことがらである。⁽¹⁹⁾ 本論ははまだその端緒にふれ得たに過ぎない。さらなる研究が深められることを願う次第である。

注

- (1) 小野寛氏「笠女郎歌群の構造」『学習院女子短期大学紀要』七号1970・2初出、『万葉集歌人摘草』1999・3所収、久松潜一氏「笠女郎について」『明日香』三五巻一号1970・1初出、『万葉集と上代文学』笠間書院1973・7所収、山本健吉氏「否にはあらず―笠女郎、紀女郎を中心に―」『大伴家持』(筑摩書房1971・7)、桜井満氏「家持をめぐる女性たち」『万葉集講座』第六巻1972・12)、山崎馨氏「笠女郎の歌」『万葉集を学ぶ』三 有斐閣1978・3)、中西進氏「笠女郎の恋」『万葉の歌びとたち』角川書店1980)、平館英子氏「笠女郎歌の構成」『東京成徳短期大学紀要』十七号1984・3)、岡本雅彦氏「笠女郎の歌とその構造」(『万葉』(檀原図書館)二七号1997・3)、また配列論として、新潮『古典集成』の六群構成があり、同じく伊藤博氏「釈注」がある。伊藤氏は『釈注』のなかで、当該歌群を六群に分けた上で、「この六群は笠女郎が歌を贈りやった回数と考えられる」と述べている。なお、近時、笠女郎歌の地名に着目し、実際に北陸路に参じたものとして歌の構成順序を考ふる吉田金彦氏『秋田城木簡に秘めた万葉集―大伴家持と笠女郎―』(おうふう2000・9)がある。
- (2) 青木生子氏「笠女郎―文芸史的位相について―」『上代文学』七1957・12初出、『日本古代文芸における恋愛』弘文堂1961・5所収
- (3) 青木生子氏「相聞の歌と『死』」『萬葉挽歌論』塙書房1984・3)に、相聞歌において、「我」「命」「生く」とともに「死」を多く用いることは、恋愛に苦悩する一人の人間として体験したことであるために、初めて意識にのぼった観念であったとする。ここもまた、当該歌群で初めての「死」の表現であり、それが我が身の瘦身によることで、「恋にもそ人は死にする」と

いう現実が再認識されていると考えるべきであろう。そこには自身を顧みる客観性が存している。

- (4) 「念」は「おもひ」という名詞ではなく、下接していく「死にす」に対応させて、「おもふ」の動詞として理解したい。「物思い」のために「死す」のではなく、絶え間なく「思う」ことの連続性の中で「死」が実感されるのであろう(「念」の字義については、本論参照のこと)。

- (5) 小学館『新編全集』の六〇三歌の下句の現代語訳は、「千度もわたしは繰り返して死んでおりました」とあるが、人麻呂歌集二二三九〇歌は、「わたしは千回も死に変わってしよう」と訳している。旧編『全集』も同様であるが、この両者の訳の違いについては、それ以上触れるところがないため、真意は測り難い。また、伊藤『釈注』は、「シニカヘル」を「死ぬ状態に何度も返る意」とし、「千度も繰り返して死ぬほど思った」という意味合いに解している。

- (6) 稲岡耕二氏『全注 卷十一 二三九〇歌「考」』に記された論旨の初出は、「人麻呂歌集略体歌の方法(二)―集団歌謡性としての笑い―」(『萬葉集研究』第六集 塙書房1976・7)に見える。

- (7) 女歌の自己へ向かう「批評」の表現については、鈴木日出男氏「女歌の本性」『古代和歌詩論』(東京大学出版会1990・10)が参照される。後期万葉の女性歌人による、「身」と「心」の捉え方の方法的な斬新さについては、小川靖彦氏『身』と『心』―万葉から古今へ―(『国文学研究資料館紀要』一九九〇・三)に多くを学んだ。

- (8) 「恋ふ」ことが、助詞「ニ」を受け、「(君・妹)ニ心惹かれる」という受け身の行為であるのに対し、「思ふ」が「(君)思う」と相手をいったん対象化することにより、自分自身を基点として発する情であることはよく言われることである(伊藤博氏『万葉集相聞の世界』塙書房1981・4、伊藤博氏『恋ふ』の世界』『萬葉集の表現と方法 下』塙書房1976・10、松田浩氏「恋ふこと・思ふこと―『万葉集』におけるその連関―」『三田国文』二七号1998・3)。なお中西進氏(注1論文)によれば、この歌群は

「恋ふ」ではなく、「念ふ」を中心とする歌群(第三群六〇二―六〇八)と捉えて当該歌を区分する。中西説によれば、「思ふ」の「おも」は「重し」と同じく、家持の愛か得られないために心か重く沈む状態であるとする。小野寛氏(注1論文)もこれに同調する。

- (9) なお『荀子』(賦篇)に「與愚以疑、願聞反辞、其小歌也」とある楊倞注に「反辞、反覆叙説之辞、猶楚詞乱曰」と注されるのもまた、「反辞」と「乱辞」が同様、一篇の大意を繰り返すものであることを示している。また、観智院本『類聚名義抄』には、「反」に「カヘスカヘス」の和訓がある。
- (10) 「復」は『篆隸万象名義』に、「扶救反、重也、反也、返也、報安也」とあり、「反」と「復」の文字が字義において通じることが知られる。

- (11) 高山寺本『篆隸万象名義』の影印には、「變改、常、改」とあり、それによると、「改也、常也、改也」と翻字せざるを得ないのだが、本論に引いたように漢籍に見られる「変」の訓詁に「改_レ常」「易_レ常」と多く見られることに拠れば(『素問』(皮部論)「則絡脉盛色変」の注「変謂易其常也」など)、「改_レ常也、改也」の誤りと考えるのが正しいと思われる。

- (12) 先に『廣韻』を挙げたが、その韻について、「反」は「上声阮韻第二十」に排され、また「変」は「去声線韻第三十三」に排されることから、これらの字が互いに通用する可能性は少ないように思われる。

- (13) 「を_レつ」「を_レちみず」「を_レちかへる」の語で、「若」一字で「を_レち」を表わすのはこの二例のみである。なお、『長屋王家木簡』には、「若反」の文字が見え、「ヲチカヘリ」と読むかと言われる(奈良文化財研究所「平城宮発掘調査出土木簡概報二十一―長屋王家木簡一―」1989・5、東野治之氏『続日本紀』と木簡二「新日本古典文学大系月報」3 1989・3)。

- (14) 『時代別国語大辞典 上代編』は、三九七九歌を「カヘル」の項の②「戻る。変える。行くと対照して用いられる」とする語例にあげる。また、『岩波古語辞典 増補版』は、三三三三歌を「かへる」の第二義である「二つのものを互いに入れ違えにするのか原義」の④として「時や場所を別にする」の語例としてあげている。三三三三歌について言えば、「易」の字義に「異」

「始」(万象名義)などの意が認められることから、別のものと入れ替えるといった意(岩波『古語辞典』の理解に同)として用いられているものと推察される。

(15) 月や時が「かはる」という表現は万葉集に既に幾例か見られる。「立ち易月重なりて逢はねども」(二七九四)「あらたまの月の易は」(三三二九)など。

(16) 『観智院本類聚名義抄』には、「変」の文字に、「変、碑媛反 カヘル ア|タラシ カタチ マレナリ タツ カハル」等の和訓が見られることも参考になる。

(17) 女郎の歌の対象との距離のとり方について、窪田『評釈』は次のように指摘する。窪田氏は、五九七歌と五九八歌に断層を認め、それぞれの歌柄の違いについて「以前の歌は、同じく恋の悩みとはいふものの、その恋は距離を置いていることから起こる憧れであり、その悩みは、その距離の撤そうとすればたやすくも撤せられるものと思うにもかかわらず、事実としてはたやすくなくないところからくる懊悩であった。すなわち家持を夢として抱いての上の悩みという趣のものである。しかるにこれに先立つ歌より以後のものは、距離を撤して身を間近に置き、憧れの明るく軽いものの代わりに、情愛の質実なるものを求めようとして、そこにまた異なる意味の距離を感じての悩みなのである。昂奮が失せて沈潜した情となっているのはそのためと思われる。」と述べる。また、このような「念ひ」の在り方か、女歌に通じるものであることの指摘が、荻原千鶴氏『吾が念ふ君(妹)』考(『萬葉集研究』第二十三集1999・11p.275)に見られる。

(18) なお、当該六〇三歌については、従来、『遊仙窟』に「能く公子ヲシテ百廻生カシメ、巧ク王孫ヲシテ千遍死ナシメム」とあることを引く注釈書があるが(木下『全注』、新編『全集』ほか)、生死が一回的でないということの発想裡には、これらの影響があると思われるものの、笠女郎の当該歌の歌がらに直接的に響くものではないことから、本稿では特にこれを問題としなかった。

(19) このことについては、他の笠女郎歌の文字について考証を深めていかなければならない問題であるが、女郎の文字遣いについて、例えば集中二例の「為形」、集中一例の「景」、同じく一例の「額衝」などについて、笠女郎独自の歌がらに深く響き合った文字遣いであると考えられる。また、濱田雅教氏「笠女郎作品考」(『浜口博章教授退職記念国文学論集』1990・12)に、笠女郎の文字についての特殊性が、若干ながら紹介されているほか、五九六歌「あにまさらじか」について『全集』は、「副詞のアニは『あに良くもらず』(紀・四九)などのように打消と呼応するのが日本語本来の用法であるが、ここは漢語におけると同じく、確実性の濃い推量を表わす(小島博士教示)」と指摘している。なお、『新古典文学大系 萬葉集 一』(岩波書店1999・5)の脚注・語注には、笠女郎の漢籍受容の在り方について、多く示唆的な見解を示しているもので、今後の研究が望まれる。